空襲下の結婚式

高橋星湖（高根台・71歳）

敗戦の年、それは私にとって結婚の年でもあります。学徒出陣の年、私は早稲田大学を繰上げ卒業し、大日本産業報國会中央本部に入りました。

間も無く、戦況が悪化して、「産報運動を軍需産業の現場に展開せよ」との命令が出たので、中島組の一員として、群馬の中島飛行機太田製作所に派遣されました。

〝教育課〟の職員として、産報運動の拠点になることになっていましたが、特に血の気が多かった私は、工場全体に、地に足のついた運動を展開するためには、我々自身が直接第一線の現場に飛び込むべきだと信じて、自分だけ特に、職業紹介所の手続きを経て、組立工場の油圧関係の見習工として配属してもらい、〝呑龍〟という、陸軍の重爆撃機の組立て作業に参加しました。

戦況が益々悪化して、間もなく爆撃機の製作は中止され、戦斗機専門に、そして特攻機の突撃生産へと移って行くのですが、工場は、軍需省の命令で、空襲の合間に工場全体の工程管理を、近代的な流れ作業方式に急遽改革することになりました。私は突然呼び出され、再三お断わりしたにも拘らず、その大改革を超特急作業で実施するための、責任者として任命されてしまいました。現場倉庫全体と工場内輸送関係全般の責任者として任命されてしまったのです。作業課推進中隊長として、部下一、二〇〇名を率い、第一線の青年将校になりきって、常に二十四時間ぶっとおしの三交替勤務の陣頭指揮に当たることになりました。

どうやら工場が流れ作業方式で流れ始めた頃、私は、突然上司から縁談を持ち込まれました。私はある事情から当分結婚しないことにしていたのですが、その相手の父親が、工場の近くの歯科医であることを知り、急に乗気になりました。この人は、本職の歯科医師としてよりも、警察や中学校の剣道師範として県下に広く名の通った人でした。しかも、私が早稲田の剣道部員として教えを受けた、高野佐三郎先生の、特に信頼されていた愛弟子であり、当時数少なかった練士の上の教士でありました。陰乍ら、その古武士的な風格に敬意をいだいていた矢先きに、その人から自分の娘をとの声がかかったということで、否も応もありませんでした。それとなく、教育課で働くご本人の姿を垣間見ては説明を聞きますと、申し分ない立派な女性です。話はトントンと進み、親同志の見合いも済ませ、式は二月十一日、当時の紀元節を期して、中島のクラブで行われることになりました。

全国各地、連日の空襲におびえていた昭和二十年のことですから、あらゆる物資は欠乏の極に達していました。米も、酒も、煙草も、調味料までが配給でなければ手に入りませんでした。だが、とにもかくにも式だけは

立派にと準備のために関係者の懸命な努力が続けられました。ところが、式の前日、つまり二月十日に中島飛行機太田製作所が大空襲に遭ったのです。B29九十機の大編隊が、我々の居る太田へ向って来たのです。

当時、陸海軍の航空機工場の内、空襲を受けずに残っていたのは、陸軍関係のこの太田とすぐ隣りの海軍関係の小泉だけであったので、これを目がけて、まっ直ぐにやって来たのです。我々は国防色の制服制帽にゲートルを巻いた上に、日の丸に神風と書いた揃いの手拭いの鉢巻きをして、木製部品を多く使った、体当り用の特攻機の生産に、文字通り挺身していた最中なので、特設防護団員は、「空襲警報下でも職場を死守せよ」との厳しい命令を受けていたし、我々幹部は、皆その覚悟でした。推進中隊の本部は工場の真中にありました。

敵機の方向がこちらに向っていることを知ってから、工場の床下に、以前、大きな木工機械の設置されていた跡の、相当大きな穴が残っていて、その上に厚い鉄板で蓋がしてある場所が見つかりました。いざという時には、そこへ我々本部員数名もぐり込めることが判ったのです。よく晴れた日でした。敵機の大編隊が近ずくのがよく見えました。銀色に輝く、その威風堂々たる姿は、実に美しくさえありました。わが軍の高射砲は、はるか下の方で頼りなくさくれつし、思い出した様に現われ、体当りして行く勇敢なわが戦斗機は、途中で射ち落とされ、煙の尾を引いて視界から去って行きました。敵機来襲を告げる警報が狂ったようにうなり、ひびく中で、まぎれもなく我々自身がねらわれていることを知り、先程見つけて掃除して置いた穴に飛び込みました。

厚い鉄板で蓋をしてから、おしえられたとおり、両手で耳の穴と眼を押さえ、口を開けて、穴の中にちぢこまりました。丁度その時、トタン屋根に夕立がはげしく降る時の様な音がしたかと思うと、ヒュー、キーンという音が、まるで頭をキリでもまれる様な感じで、次々に無数にせまって来たかと思ったとたん、大音響と共に、穴の中はものすごい砂煙りで真っ暗になり、我々は左右に三十糎位いづつ振りまわされました。気がついて見ると、自分はどこも怪我をしている様でもないし、一緒にいた連中もどうやら無事らしいことが判りました。首を出して見ると、工場はメチャクチャにこわされ、各所に黒煙がもうもうと上がっていました。コンクリートで固められている工場内の地面の二十米程しかはなれていない所に、直径約十米位いの大きな穴がポッカリと空いていました。さっきのがこれだったのか。

―あとで二五〇kg爆弾であることが判りました。

「大事な飛行機を焼かれてたまるか」と、部下と共に組立て中の翼を運び出したり、手押しポンプで、ネズミの小便のような心細い水をかけて見たり、次の編隊を近くの建掛け式の防空壕でやり過ごしては、又それを繰り返したりしました。全く夢中だったので、余りおそろしいという実感はありませんでした。

跡片付けにとりかかって、初めて空襲がいかに大規模なものであったかを思い知らされました。

約四万人の働いていた大工場が、一瞬の中に、その八十%以上をメチャクチャに破壊されてしまったのです。犠牲者も百数十名に達しました。その中には、私の部下の七名も含まれていたのです。三名一緒に防空壕で、爆弾の直撃を受けた部下の、遺体と遺品とは、高い組立工場の屋根の鉄骨にへばりついていた足首など、仲間の人達が懸命に探し集めても、全部で、当時の木製のミカン箱一つにしかなりませんでした。遺体はすべて武道場

に集められ、我々幹部職員が、交替で見張りに立ちましたが、この時つくづく空襲の恐ろしさ、むごたらしさが、身にしみて感じられました。

家にかけつけて見ると、家族達は無事だったし、先方の御家族も無事だったことが判りました。

しかし、この有様では、結婚式も何もあったものではない、当分延期せねばと思いました。しかし、嫁方とすれば、そんな訳に行かぬし、旅行をするにも一々役場から許可をとらねば切符が買えなかった中で、岩手や山形や東京などから、式に参列するためはるばるかけつけて呉れた親類縁者達のことをかんがえても、この際どんな無理をしても挙式せねばということになり、一週間だけ延ばし、二月十七日とすることになりました。ところが、又その前日に、こんどは艦載機グラマンの四十機の編隊による空襲をうけたのです。この時、前回の空襲で軽うじて残った建物が、全部きれいに吹き飛ばされてしまいました。

グラマンは、真黒な胴体で、動くものを見ると、しつように急降下して徹底的に破壊し、機銃掃射で人畜を殺傷しました。前回の空襲以来、ラジオの情報で敵機がこちらに向っているらしいことが判ると、空襲警報が鳴るのを待たずに、人々は近くの山の横穴式防空壕へかけつけ、もぐり込んでしまいました。もう工場では、仕事に手がつかない有様になってしまいました。その日も、部下が三名負傷してしまい、私自身もグラマンの機銃掃射に遭って、夢中で伏せた、約一米五十糎程前方に弾丸が鋭い音を立てながら線状に突きささって行くのに胆を冷やされました。もうこうなるとクラブでの挙式など不可能となり、自宅で身内の者だけで極く簡単に済ませることになりました。自宅は工場のすぐ近くにあったので、もし空襲の際は危険なので、空襲警報が出たらすぐに、お客さんは横穴防空壕へ、必要最小限のメンバーだけは近くの防空壕に入ることになっていました。

しかし、かんじんの当日にも空襲警報が何回も鳴りひびき、そのたびに人々は防空壕へと走りまわりました。

一応勢揃いした仲人の製作部長と事実上の仲人である上司とは、共に特設防護団本部へと急行しました。この様なことを繰り返してはおれぬので、他の人々は横穴防空壕へ置き去りにし、花ムコ、花嫁と私の父と叔父、嫁方の父と嫂とだけで式を強行することになりました。

家は、工場のすぐ近くにあるのです。昨日の空襲の際に、屋根は一部こわされていたし、庭には不発弾が突きささっていた程です。

花ムコは、戦斗服にゲートル姿、花嫁は防空ズキンをかかえたモンペ姿、杯ごとの道具がならべられた時に、空襲警報が鳴りひびきました。ラジオは東部軍管区情報をさけび続けています。その中で、もうこうなったら「死なばもろ共だ」ということになり、父が得意の謡曲で「高砂」のさわりをうなりました。

周囲の不気味な静けさの中に、朗朗とひびくその祝いのうたいは実に厳粛でありました。

名実共に「死なばもろ共」でありました。何はなくとも三々九度の儀式がとどこおりなく終了した時に、皮肉にも空襲警報が解除されました。仲人の製作部長と、実質的な仲人である上司とは工場の特設防護団に詰めきりでしたが、仲人の奥さんが、「どういたしましょうか」とかけつけて、そのことを知り、よかった、よかった、おめでとう、おめでとうということで防空壕からの人々を迎えて形だけの披露宴が行われました。本当に形ばかりの、昨今では考えられぬ程質素な、小規模なものでした。しかし、実に真剣で厳粛な結婚式でありました。

勿論、新婚旅行などありません。空襲の標的になる工場のすぐそばの自宅で、毎晩必ずといってよい程、ゴロンゴロンと無意味な音をひびかせながらB29が通り過ぎて行くのを聞きながら、枕元にモンペとゲートルを用意して寝る新婚生活でしたが、最初から正に一心同体になり切ることが出来ました。私は、この頃のことを今でもはっきりと記憶しているし、ある意味では本当によい結婚式だったと誇りに思っています。丁度、私が二十六才、妻が二十三才でした。

結婚記念の写真は、約三カ月程過ぎてからわざわざ県都前橋まで出かけて行って撮影して貰いました。私は国民服に礼装用の略章をつけたもの、家内は花嫁衣装にかつらなど七つ道具をかついで行って、二人だけの写真をとったのですが、これは生まれて来る子供に、将来見せてやれるようなものが是非欲しいという、家内のたっての願いによるものでした。

当時は、フィルムも現像液も極度に不足していたために、出来上がって来るのに三カ月もかかりました。立派に出来上がったその写真を受け取って来た翌日（八月五日）、前橋は大空襲に遭って、破壊され、焼き払われ、その写真館も全焼してしまいました。これ、すべて敗戦直前の出来事だったのです。

今年は丁度四十五年目に当たるのですが、二十五年目に当たる昭和四十六年の夏、薬剤師として働き始めた長女美智が、出来なかった新婚旅行の替わりにと、そっと買って置いて呉れたクーポン券で、銀婚旅行に、能登、金沢、永平寺の周遊をして来ました。

その旅先で当時のことがつくづくと思い出され、物は無くとも実に生き甲斐のあった日々、生死を共にし、互いに肉親同様に協力し合った当時の人々が実になつかしく思い出されました。

今、私達は、当時夢にも考えられなかった程の豊富な物資、便利な生活の中にひたっていますが、それにも拘らず、常に人間的な豊かさや人間的なうるおいの欠如をなげかわしく思い、ウソと誇張に追いたてられ、絶えずいろいろな不安に付きまとわれる様な日々を重ねています。この様な中にあって、むしょうになつかしく思い出されるのは、当時の生活、当時の仲間達であります。

